

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第二十主日C年

小西広志

2022年8月14日

朗読箇所

第一朗読 エレミヤ書 38 章 4-6、8 - 10 節

第二朗読 ヘブライ人への手紙 12 章 1 - 4 節

福音朗読 ルカによる福音書 12 章 49 - 53 節

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 8 月 14 日、年間第二十主日となっています。今日の三つの朗読をシノドスの教会の観点から読んで味わってまいりましょう。

この民のために平和を願わず、むしろ災いを望んでいるのです

第一朗読は『エレミヤ書』からです。まず、今日の朗読箇所の歴史的な背景を見てみましょう。

歴史を詳しく見てみると、バビロン捕囚は二度ありました（紀元前 597 年と 587 年）。二つの捕囚の間にバビロニア、あるいはバビロンともいいますが、バビロンによって南ユダ王国の王に立てられたのがゼデキヤ王です。二度にわたる捕囚の間の 10 年は反バビロン派と親バビロン派とで南ユダ王国は世論は二分されていました。

当時の中東の覇者であるバビロニアはカルデア人の軍隊を使ってエルサレムに侵攻しようと包囲していました。しかし、南からエジプトのファラオの軍隊がそれを阻止するために北上してきました。南ユダ王国は両大国に挟まれたわけです。ゼデキヤ王はどちらに組みするか決断を迫られていましたが、優柔不断でした。

その頃、預言者エレミヤは故郷アナトトに土地の相続のために帰ろうとしてエルサレムの町を出ます。それがバビロニアへの降伏、投降、裏切りと見なされて、書記官ヨナタンの家の丸天井の地下牢に監禁されます（エレ 37 章 1-17 節参照）。反バビロン派の仕業です。ゼデキヤ王はエレミヤを宮殿に連れてきて監視します。「監視の庭」に入れられ、毎日パン一個与えられました（18-21 節参照）。エレミヤはひるむことなく語り

ます。「この町に留まる者は、剣、飢え、疫病で死ぬ。だがカルデア人の所に出ていく者は生き永らえる…主はこう仰せになる。この町は必ずバビロンの王の軍隊に渡され、王はこれを取る」(38章2-3節 フランシスコ会訳)。これを聞いて宮廷の高官たちはエレミヤを殺すことを進言します。ゼデキヤ王は反論できず、エレミヤは水溜の中に綱で下ろされてしまいます。そこには水はなく泥だけでした(4-6節参照)。エレミヤは泥中で飢え死にを待つだけでした。今日の第一朗読は、こういった預言者エレミヤの絶体絶命の場面からです。

4節にある「この民のために平和を願わず、むしろ災いを望んでいるのです」に注目しましょう。エレミヤがバビロニアへの投降をしようとしていたと考える反バビロン派の立場は、バビロニアとの徹底抗戦です。彼らは奇跡的な勝利があるだろうと信じていました。しかし、その態度は自分たちの保身のためだったのです。もし、負けを認めたら、すでにバビロニアに投降したユダヤ人たちによってひどい目に遭わされるのではないかと考えたからです(38章19節参照)

平和

第二朗読を省いて、福音朗読に移りましょう。「平和」という単語に注目してください。『ルカによる福音書』には「平和」(ギリシア語はエイレネー)が何度も登場します。ここでは、『ルカによる福音書』の中でイエスさまが語る平和をあげてみましょう。

まず、7章に「あなたの信仰があなたを救った。安心(エイレネー)して行きなさい」(7章50節)とあります。そして、8章には「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心(エイレネー)して行きなさい」(8章48節)ともあります。そして、お弟子さんたちを派遣する場面で「どこかの家に入ったら、まず『この家に平和(エイレネー)』と言いなさい」(10章5節)とあります。

これらの例からイエスさまが「平和」を望んでいたことは明かです。しかも、貧しく、父なる神さまに頼らなければひとときも生きることのできない人々にこそ「平和」があると考えていたのでしょう。

この「平和」は信仰を前提としています。そして、信仰に基づいて生きる人々、すなわちお弟子さんたちは、「平和」をもたらす使者となります。

今日の福音朗読で「わたしは地上に火を投ずるために来た」(49節)とイエスさまがおっしゃいます。地上には不信仰が蔓延しているのです。不信仰のもとでイエスさまが「平和」を説き、「平和」を生きたとしても、「分裂」しか生じません。

まとめ

今日の第一朗読と福音朗読との関わりが分かりにくいように思います。二つの理解の可能性を示してみましょう。

最初の手がかりは、先ほど指摘した「この民のために平和を願わず、むしろ災いを望んでいるのです」(4

節)です。反バビロン派の立場はバビロニアとの徹底抗戦でした。彼らは奇跡的な勝利があるだろうと信じていました。しかし、その態度は自分たちの保身のためだったのです。

ですから、「この民のために平和を願わず」は嘘に満ちた表現だと思います。エレミヤと敵対する人々が考えている平和とは自分たちの身の安全を確保するための平和だったのでしょう。実は、イエスさまが考えている「平和」と、わたしたちが考えている「平和」とには隔たりがあるのではないのでしょうか。さきほど指摘しましたように、信仰を前提にしなければ真の「平和」は訪れないのかもしれないかもしれません。

もう一つの手がかりとなるのは、第一朗読の『エレミヤ書』38章8節に登場する「エベド・メレク」です。第一朗読では省かれた7節に次のようにあります。

クシュ人の宦官エベド・メレクは、彼らがエレミヤを水溜めに入れたことを聞いた。その時、王はベニヤミンの門の所に座っていたので（フランシスコ会訳）。

ちなみに「クシュ人」とはエチオピア人を指すと考えられます。「エベド・メレク」とは「王の僕(しもべ)」という意味だそうです。

エベド・メレクは唐突に登場する人物ですが、彼の仲介でエレミヤは絶体絶命の状況から解放され、ゼデキヤ王ともう一度相まみえます。そして和平への道が始まります。

「平和」の実現のためには「平和のための仲介者」が必要なのです。自らの力では「平和」は実現不可能なのです。まさに、イエスさまは「平和のための仲介者」としてこの世に来られました。そしてこの仲介者はエベド・メレクとは違って、自分自身のいのちをささげることで「平和」を実現する方だったのです。

それではまた来週。